

# 強行遠足新聞

甲府一高 生徒会係  
平成21年度版 第1号  
平成21年9月25日

## 強行遠足は哲学的行事である

校長 跡部 和



全国的に知られた、本校の伝統行事「強行遠足」が十月十日から十一日にかけて実施される。大正十三年に始められたこの行事も今年で第八十三回となる。長年

の間に生まれた伝説、美談、こぼれ話等は枚挙に暇無く、山梨、長野に限らず全国版の新聞、テレビ、雑誌等に何度となく取り上げられている。しかし、ほほえましい話だけではない。悲しい出来事もあった。平成十四年の第七十六回強行遠足において、当時一年生の女生徒（水谷法栄さん）が暴走してきた車にはねられ死亡するという痛ましい

事故がおきている。水谷さんとその御家族の皆様にあつたため追悼の意を捧げるとともに、今後の強行遠足の無事安全を祈るばかりである。実施に際しては、生徒諸君は、心身のコンディションを整え、細心の注意を払うと同時に、強行遠足は、PTAや同窓会の皆さん、検印所を提供してくださる沿道の方々、医療機関や警察の方々を始め、多く

の方々の協力があつて初めて実施できるのだということとを忘れず、感謝の気持ちをもつて参加して欲しい。さて、私個人もかつて生徒として第四十一回から四十三回までの強行遠足に参加した。北巨摩の田舎育ちであつたせい、自分では特別意識したことはないが比較的健脚であつたよう

で、一年次には小諸到着全校で二十八位であつた。このときは帰途、中央線日野春駅で下車し武川の家まで四、五キロの山道を歩いて帰つた程余裕があつた。二年次には多少きつかつたが、それでも八十何位かで小諸に到着できた。三年次は、歩きたびに大腿骨が腹部に突き刺さるような痛みに耐えきれず白田で途中棄権した。白田駅から帰りの電車に乗り込んだが、小諸

から帰ってくる仲間たちに対して、妙にひけめを感じた記憶がある。白田での途中棄権は今でも残念に思えるくらい強行遠足の思い出は四十年経つた今でも鮮明である。弘法坂からきつくなる野辺山までの上り。真つ暗闇の中、懐中電灯に照らし出される直径二mほどの道、聞こえるのは自分の足音だけという世界で考えた色々なこと。同行した友人との話（小説や進路や恋愛の事など、学校ではあまり話せないような話題も現実離れした真夜中の山道では銜いなく話せる）。たまたま途中同行することになった上級生や下級生との会話。早朝朝靄に煙る千曲川の流れ、りんご畑など。暗いうちは無意識に歩けた道も、八千穂、羽黒下、白田、中込あ

たり、明るく気温も上がつてくる中、前方遙か彼方まで見通せるまつすぐな道に疲労感が増した記憶がある。終盤の岩村田、三岡、小諸の記憶は、先が見えてきた安心感、疲労からであらうか不思議と薄い。一年次、海ノ口、松原湖あたりであろうか、夜中の二時、三時頃、寒さと寂寥感、民家の暖かい布団と炬燵が恋しくなり、来年はもうこんな行事には絶対参加したくない、当日は学校を休んでしまおうなどと考えた。強行遠足が終わってしばらくはそんな思ひでいた。ところが、翌年また秋風が吹く頃になると、心身に深く刻み込まれた強行遠足の記憶が懐かしく蘇り、居ても立つてもいられなくなるのである。辛かった感

覚はずべて消え失せ、心地よい達成感として残り、加えて、楽しかった記憶、美しい景色、先生や手伝いの人達の暖かい声援だけが思い出された。

私は今思う。非日常的な時間・空間での、悩み・雑念との対峙、痛む足を引き摺りながらただ独り黙々と歩き続けるとき無心状態は、修験者の荒行にも通ずるものがあり、この襪ぎにも似た経験をとおして初めて甲府一高生としてのDNAが体内に組み込まれ、永く引き継がれていくのである。

甲府一高の強行遠足は、単なる体育行事ではなく、哲学的行事であり、リオのカーニバル、諏訪の御柱祭など、その民族や住民の生活の一部、活力の源となっている民俗的行事のように、甲府一高を語るとき欠かせない風俗・習慣なのである。

生徒諸君の無事安全と健康を祈る。

## 今年も男子は夜間歩行

### 男子は十日二十二時発



今年の強行遠足の概要が固まった。本年度も男子は長野県の小海町までの75・3km、女子は須玉小学校を出発地点とする30・3kmで昨年からの変更はない。

男子は10日(土)午後10時に出発、11日(日)午後2時に終わる。制限時間16時間。女子は11日(日)午前7時30分に出発、午後3時に終わる。制限時間7時間30分。男女とも出発時は人員点呼の後、係員の服装・携行品の点検を受け、号砲を合図に最初に3年生が出発し、5分後に2年生、その5分後に1年生が出発する。

強行遠足翌日の12日(月)は体育の日で休み。13日(火)は通常の時間に登校し、HRで出欠・最終到着地点の確認を受け、校長先生の「終了宣言」をもって第83回強行遠足は終了する。2校時から通常の授業となる。男子出発の10日(土)が実施不可能な場合は男女とも中止となり順延はなく、13日(火)は平常授業となる。

「今年もコップを持参」  
服装は、上下とも体育着を着用。ハーフパンツは禁止なので必ず長ズボン着用すること。また、上半身は、半袖と長袖の体育着を用意し、気温の変化に応じて各自で着替えるようにする。携行品に関しては、男女とも寒さ対策として、ウインドブレーカー・ジャンパー・手袋などを、雨対策としてポンチョ・カッパなどを必ず携行すること。着替えも必ず準備する。着替えるにはビニール袋に入れ濡れないようにし、併せて着替えたものを入れるためのビニール袋も用意することが必要である。また、食料

(弁当1〜2食、飴類、飲み物)を必ず携行し、栄養や水分をこまめに補給できるようにしておかなければならない。なお、今年はいんフルエンザ対策として、各自が水分補給用のコップを持参すること。男子は夜間歩行になるため、単独歩行を避けるとともに、蛍光タスキと懐中電灯を用意し、安全対策を怠らないようにすることが重要となる。なお、懐中電灯は長時間の使用になるため、必ず新品の電池を入れてくること。スタートからゴール・帰宅までを想定し、必要なものはすべて自分で背負っていくことが求められる。

保護者の皆様へお願い  
学校ではこの強行遠足が、その目的を果たし、何の事故もなく終了できるように万全の配慮を行っています。生徒の安全確保のためにも、自家用車での伴走・応援はご遠慮下さい。また、生徒が前進を止めた場合、野辺山・小海到着後帰宅する場合はの車での迎えはご遠慮下さい。学校が帰りのバスを手配しています。

強行遠足は

自己教育の場である

体育振興係主任 平賀 国康



「MENS SANA IN CORPORE SANO」とい

う言葉を一高生、一高関係者であればご承知のことと思いますが、このラテン語のレリーフが本校体育館の壁面に記されていることをご存知でしょうか。「健全な精神は健全な身体に宿る」という意味だそうです。これは東京タワーを設計した本校卒業生の内藤多仲さんが本校旧体育館を設計した際に、その入り口にこのレリーフを残したものと

す。時代や校舎も変遷しましたがが一高魂の一つとして現体育館の壁面に引き継がれ掲げられています。一高には百二十九年の歴史と伝統から様々な校是や Motto があります。「文武両道」「質実剛健」「自主自律」等これらのベースは冒頭のラテン語が異口同音に訳されているようにも思えます。

体の訓練はない」「精神の限り歩く」「真剣勝負に因って、剛毅不屈の精神を養いたい」との考えを持ち、「敢えて強行遠足と名づけたのは、自分の体力に依じて歩けるだけ歩く」ということを強調されたそうです。したがって、強行遠足は順位や距離を競うものではなく、各自の体力に依じてできるだけ遠くへ行くことにより、自己の精神力、体力を培うまさに一高伝統精神である「質実剛健」を発揮する最大行事なのです。草創期は「24時間で行ける」ところまで行き、あとは自分で帰って来い」というものだったそうで、終点制度の無かった時代の最長歩行距離としては、昭和32年に岩間孝吉さん(サッカ一部に所属)の一高から長野県大田市築場までの167.1kmという記録が残されています。

準備をし、最善を尽くして欲しいと願います。昨年から6年振りに男子の距離延長に伴い夜間歩行が復活しました。その前提として「自他の命を尊重し、事故無く無事に歩き通す」ことが欠くことのできない大切な意義になります。平成14年の第76回大会で松原湖検印所過ぎで暴走してきた車により当時1年生の水谷法栄さんの尊い命を失いました。一高関係者の全ては強行遠足を安全に遂行する責務があります。このことを達成するためには、その日の強行遠足だけを頑張れば良いのかと言うとそれだけでは足りません。日頃から交通ルールやマナーを守り、安全や安心の保障された環境を自らがつくりだし、規範意識をきちんと身につけた態度が必要になります。生徒諸君は普段の私生活や学校生活から良識ある正しい行動が取れているでしょうか？これを機に改

めて自己を見直してみてください。次に、気力で頑張ろうとしてもそれを支える体力が無いと継続困難です。体育の授業では勿論ですが、自己の健康状態や体力を日頃から自らが把握し、健康管理に努めることは今後の生徒諸君の生活に必要な不可欠になります。男子は75.3km、女子は30.3kmを自己の精神力と体力でどのように対峙し、各自の限界にチャレンジするのかが、体力づくりに取り組む姿勢も大切になります。ちなみに、昨年の到達率は男子43.8%、女子96.9%でした。また、新たな健康問題として新型インフルエンザが我々の身近にも迫ってきています。今日では今以上に生活行動に高い意識を持つことが必要になります。今回の強行遠足では、感染予防のため水分補給用コップの携行を義務づけました。毎日の生活から手洗いやうがいを励行し、

我々が自ら感染症予防に努める姿勢を身につける良い機会であると考えます。前述したように「強行遠足」には数限りない意義が包括されています。長い道のりを一歩一歩着実に歩みを進めぬ限り前には進めません。その道中は平坦なものばかりではありません。「何故こんなことをしているのだろうか?」「もうやめてしまおうか?」「今後の高校生活はどうなるのか?」「大学受験は大丈夫なのか?」「様々な思いが去来し、日常では気付かない「自己と向き合う」貴重な時間を体験が訪れます。一高を語る時、社会背景や時代が移ろうとも、老若男女を問わず「強行遠足」は一高生共通のインシエーションです。「強行遠足を体験することによって自己教育の場を得ることができ、百万遍の言葉による教育よりも一つのかけがえのないこの体験が自己をつくるとい

つたら言い過ぎであろうか。こういう体験による自己教育の場を周到な準備によって用意し続けてくださったことを感謝したいと思う。「岩間孝吉さんはこのように述べています。最後になりますが、今年平成4年より交流が始まった、北海道の名門北見北斗高校の強行遠足(10月4日5日)に4名の一高生が派遣されます。強行遠足の意義を踏まえ遺憾なく一高魂を発揮するよう切望し、結びといたします。

強行遠足に関する情報確認

一高HP <http://www.first.kai.ed.jp/koumi.htm>  
携帯電話からも確認できます  
強行遠足に関するラジオ放送  
10月10日(土)  
昼1回目(11:54)YBSラジオニュース  
夜2回目(17:50)YBSラジオニュース



農道を友達と歩く女子生徒 (平成20年度強行遠足にて)

強行遠足体験記

平成二十年度卒業

植田 祥平

十月四日、午後十時。号砲の音とともに未知の体験がスタートした。初めての夜間歩行、初めての75km、不安だらけのスタートだった。今年の相棒はもっちゃんだ。体育の30分間走で彼は自分よりかなり速いスピードで走っていたため、ついていけないか、最後までいけるか心配だった。

葦崎、中田、須玉と快

調に通過して、高根に向かう田んぼ道で走っていたらアクシデント発生。右足のアキレス腱付近に激痛が。もう完走はムリかと諦めながら歩いていたら、奇跡的な復活。また走れるようになって本当に良かった。それに満天の星空と流れ星が見れて夜間歩行も悪くないと思った。

なって立ちほだかった。こは2人とも無言になり、ただ黙々と歩き続けた。まきばに近づくにつれ嬉しい音楽が聞こえてきて、長かった登り道の終わりを告げていた。

ようやく昨年までのゴール野辺山に到着。と同時に、脱落組のバスが到着。なんか残念な気持ちになり、しじみ汁を飲んでいざ未知の領域へ出発。ここからは新たに潤樹も加わり3人でゴールを目指した。市場、海ノ口をキツいな

がらも通り過ぎ、松原湖へ行く途中に潤樹が足の痛みを訴え遅れ出した。でも置いて先に行くという気持ちは全くなかった。最初は順位を気にしていたが、ここまで来たら順位よりも3人で一緒にゴールしたいという気持ちが強く、潤樹を気にしながらもペースを保つた。2年半、一緒に野球をしていたのがこんなに苦しい顔をしたのは見たことがなかった。



3人で肩を組みゴール